

アラブ韻文文学におけるテキストと伝承

森 口 明 美

Analysis of the Oral Tradition of the Pre-Islamic Poetry

Akemi Moriguchi

抄 録

アラブ文学においては一般に韻文が最高の文学的表現と考えられてきた。中でもジャーヒリーヤ時代（イスラム勃興以前の無明時代）のムアッラカート（mu‘allaqāt）と呼ばれる7つあるいは10の長詩はすべてのアラブ詩の中で最高傑作とされている。ジャーヒリーヤ時代の韻文はアラブ人の生活や精神を反映するだけでなく、コーランのアラビア語とともに古典アラビア語の成立に多大な影響を与えたとして言語学的にも重要である。その一方で、伝承過程における様々な問題点も指摘されている。本論文では、ジャーヒリーヤ時代の代表的詩人、イムルウルカイス（Imru’ al-Qays, d. c. 550）のムアッラカ（mu‘allaqa, ムアッラカートの単数形）のテキストの比較分析を行った。その結果、対象とした5つのテキストはすべて異なっていたが、その違いは限定的かつ規則的であった。

キーワード：ジャーヒリーヤ（無明）時代、アラブ詩、口承文学、韻律学、伝承

(2006年9月25日受理)

Abstract

The Arabs have admired poetry since the pre-Islamic age, considering it as the most excellent literary form for expressing their thoughts and feelings. An accepted traditional opinion says that the *mu‘allaqāt* (the “suspended odes”, the canonical seven, or ten greatest odes of the Jāhiliya) of the pre-Islamic age are the masterpieces of Arabic literature through all the ages, both pre-Islamic and post-Islamic. Not only did the pre-Islamic poetry reflect the Arab’s ways of life and their spirits, but also it contributed greatly to the linguistic development of the classical Arabic, no less than the Qur’ān did. The researchers of the pre-Islamic poetry have been always confronted with the variety of its existing texts owing to the oral poetic tradition. This article deals with the five texts of Imru’ al-Qays’s *mu‘allaqāt* (a singular form of *mu‘allaqāt*) one of the most famous pre-Islamic Arabic odes, and analyzes their differences. It was found that their differences have restrictions and regularities.

Key words : al-Jāhiliya (barbarism), Arabic Poetry, Oral Literature, Prosody, Tradition

(Received September 25, 2006)

1. はじめに

「アラブ文学」と聞いて「アリババと四十人の盗賊」や「シンドバッドの冒険」、を思い浮かべる人も多いことだろう。『アラビアン・ナイト』または『千夜一夜物語 (Kitāb Alf Layla wa Layla)』として知られるこの説話集は、9世紀頃まずその原形が形成された。その後、多くの説話がつけ加えられ、文字通り千一夜の物語りを含んだアラビア語の原典が書物の形として印刷されたのは19世紀になってからのことである。ヨーロッパでは『アラビアン・ナイト』の面白さや文学的価値が高く評価されたが、アラブ文学では純文学とは区別され、単なる娯楽と評価されることが多く(杉田, 2001:12-228)、その成立過程すらいまだはっきりとは分かっていない。

一般にアラブ文学史では、全期を通じて、詩などの韻文作品が重要視されている。特にイスラーム以前の長詩(カシーダ qasīda)¹⁾は、韻律や修辞の面でも非常に高いレベルにあり、後世のアラブ文学に多大な影響を及ぼしたとされている。近代以降は、ヨーロッパ文化の影響を受けて伝統的な詩の枠組みを打破する動きが活発化するが、その一方で、アラブ世界においてもアラブ古典詩の本格的な研究が始まった。

研究者たちの多大な努力によって偉大なるアラブの文化的遺産は今日まで輝きを失うことなく受け継がれてきた。その一方で、オリジナルテキストの決定など伝承過程で生じる問題点の多くは未だ本格的な解決にいたっていない。

本論文は、現代におけるアラブ古典詩研究の成果を比較分析することにより、韻文テキストとその伝承についての再考を試みたものである。

2. アラブ文学の時代的背景

分析に先駆けて、まず近現代におけるアラブ古典詩の研究が、アラブ文学の中で、どのような位置づけにあるのかを確認しておきたい。

一般にアラブ文学は、イスラーム以前のジャーヒリーヤ (Jāhīlīya)²⁾時代、8世紀中期までのイスラーム初期、13世紀中期までのアッバース朝期、オスマン朝支配期、18世紀以降の文学再興期に区分することができる。

ジャーヒリーヤ時代にも散文作品はあるが、文字の体系が不十分だったため、あまり発達しなかった。その代わり詩的表現の分野が傑出し、数多くの詩が作られた。詩は記憶され、口伝えされていた(ヒッティ, 1970:195, 196)。

預言者ムハンマドにイスラームの聖典であるコーランが下され、ジャーヒリーヤ時代に終止符が打たれるとアラブ文学は新たな局面を迎える。コーランとは「読誦」又は「読誦されるもの」の意味で、暗記・朗唱するのが原則であった。しかしムハンマドの死後、アラブ以外のイスラーム化に伴い、伝承に異同が生じ始め、正しいアラビア語を確立する必要性が高まった。このようにイスラーム初期においては、アラビア語自体への関心が高まり、散文文学への誕生へつながった。またイスラーム化の結果、多くの非アラブ人が文学の担い手となり、この傾向はアッバース朝でますます顕著となる。アラブ文学はコーラン

の注釈をはじめ、歴史・地理・医学・天文学・辞書・文法書・礼儀作法書など広範囲な内容を持つようになった。このような教養人として心得るべき知的教養一般は「アダブ (adab)³」と呼ばれた。アッバース朝 (749-1258) では、高度な修辭的技巧による芸術的な散文作品が数多く生み出され、その手法はすべての分野で活用されるようになり、アダブ文学の絶頂期を迎える。またこの時代、ジャーヒリーヤ時代の古典詩は、注釈が加えられ、詩集として編纂された。ヘレニズム文化とペルシャ文化を吸収、同化して、イスラーム文化は中世における重要な地位を占めることとなる。

しかし、十字軍の頃からすでに東方においては、勢いにかげりが現れ、過去の模倣に終始した創造性に乏しい作品が目立ち始める。『アラビアン・ナイト』に代表される大衆の娯楽を目的とした物語集が編纂されるようになったのはこの頃である。その後、16世紀にオスマン帝国によって支配されると、文学活動は完全に低迷した。

このような状況に一大変化をもたらしたのが1798年のナポレオンによるエジプト侵入であった。ヨーロッパの軍事侵略ではあったが、文化的には重要な意味をもつ。その一つが印刷機の導入である。すでに17世紀以降、イスラーム世界においても印刷が始まり⁴、書物の中心が写本から刊本に移りつつあったが、中東地域全域で印刷が一般的になったのは、19世紀のことである。カイロの郊外、ブーラク⁵で、1821年、本格的な印刷が始まったが、これは「アラブの覚醒」を表す象徴的なできごとであった。19世紀のアラブ古典文学の印刷は、アラブ・イスラームの文化遺産の再認識につながり、それはアラブ近代文学誕生を促すと同時にナフダと呼ばれるアラブ文芸復興運動やアラブ民族主義の高揚をも促したのである。

近現代においては、ジャーヒリーヤ時代の韻文がアラブ人の生活や性向あるいはアラブ民族の感性や信条を写し出すものとして、学問的にも芸術的にも注目され、研究が行われている。

3. アラブ古典詩の研究の歴史

アラブ文学史において最も独特で、世界に誇りえる芸術として賞賛されるジャーヒリーヤ時代の韻文は、灼熱と荒涼の砂漠地帯で生まれた。遠方に流れる水の音を聞きつけ、あるいは、はるか彼方の木立を見つけて漂泊する遊牧民族は、異常なまでに視覚・聴覚が発達していた。勇敢で不屈の精神、掠奪と復讐の習性に鋭敏な視覚と聴覚こそが古代アラブ人の特質で、彼らの眼と耳によって創り出されたジャーヒリーヤ時代の韻文は、まさに純アラビア的な文化的産物と言える。詩人は様々な物を直感的に捉え、豊富な語彙で味方を讃え、敵を痛烈に風刺して人々に深い感動を与えた。詩はジャーヒリーヤ時代における唯一の文学的表現の手段であり、部族の知力は詩で評価された。詩は敵部族に心理的打撃を加え、味方の部族を扇動し、行動に駆り立てる機能を担っていた。メッカの東方、ウカーズ (Ukāz) の定期市では毎年、詩人たちが作品を披露し合い、最高の榮譽を求めて争っていた。詩人にとってウカーズの定期市は、自分の実力を世間に知らしめる唯一の場だった。

当時の詩人は、自らが語り手として唱うことはなく、ラーウィー (rāwī) と呼ばれる語り手兼説明役が、詩の背景や詳細を注釈し、聞き手を魅了していた。また、多くの場合、ラーウィー自身も詩人で、自分もまたラーウィーを持っていた⁶とされている。

詩には短詩 (キトア qit'a) と長詩 (カシーダ) があり、一定の韻律と脚韻にのっとっている。カシーダは、ジャーヒリーヤ時代の唯一の文学的表現の手段であり、最も完成した詩形式と見なされていた (ヒッティ, 1970:197)。

イスラームになって、韻文の時代は終わりを告げたが、口承という伝統的手法はその後もしばらく続けられた。ジャーヒリーヤ時代の韻文が記録という形で継承され始めたのは、アッバース朝になってからである。ようやくこれまでラーウィーによって記憶、口伝されていたカシーダは、ムアッラカートを代表とする詩集に編纂されることになる。

ムアッラカートは、カシーダの中で特に優れた七篇を集録した詩集で「七つの長詩 (al-Qaṣā'id al-Sab' al-Ṭiwāl)」「七つの数珠つなぎの真珠 (al-Sumūt al-Sab')」「黄金詩 (al-Muḍḍahabāt)」とも呼ばれ、詩の傑作として讃えられた。ムアッラカートは、「貴重なもの」あるいは「目立ったところに掛けられた」を意味するが、その名は、ウカズの定期市で表彰された各カシーダが金文字で刺繍されて、カアバ (al-Ka'ba) 神殿に掲げられていた伝説に由来する (el-Tayib, 1983:111)。一般的には、7篇のカシーダを指すが、編者によって、七篇の選択が異なったり、九篇や十篇のカシーダを含めたり様々である。

ムアッラカート以外の詩集には、アブータンマーム (Abū Tammām, c. 805-845) によって編集された短詩集ハマーサ (ḥamāsa) や、編者アルムファッダール (al-Mufaḍḍāl al-Ḍabbī, d. 786) の名にちなんで名づけられたムファッダリヤート (*al-Mufaḍḍalīyāt*) などがある。また、歌の書として知られるアルイスファハーニー (al-Isfahānī, d. 976) のキターブ アルアガーニー (Kitāb al-Agānī) は、古代から中世にいたる詩や歌をまとめたもので、各詩や歌は、作者の名前だけでなく家系、伝記、さらには逸話にいたるまで記録されており、詩人や歌人の百科事典として評価されている。

19世紀以降、アラブの覚醒とオリエンタリズムの潮流が、アラブの文化遺産であるジャーヒリーヤ時代のアラブ古典詩に押し寄せたのは当然のことである。その本格的研究のためには、これまで各地に散在していた写本や断片を完全な形に復元することが最も基本的かつ不可欠であった。ところが、その復元は困難を極め、今なお学者たちを悩ませ続けている。ジャーヒリーヤ時代のアラブ古典詩が口承文学である以上、その記憶や伝播の途中で脱落や誤りが起こったり、ラーウィーの判断で故意に追加や削除が行われる可能性は十分に考えられる。また、作者と作品の不一致や注釈の挿入など校正時の混乱も避けられず、信憑性についての議論が繰り返されてきたことは言うまでもない。「私たちがジャーヒリーヤ文学と呼ぶものの絶対多数は、まったくジャーヒリーヤ時代の作品ではない。それらはイスラームの出現後捏造されたものである (Ḥusayn, 1926:65)⁷。」というアラブ古典詩の存在を根底から覆しかねない説まで現れ、改めてオリジナルを決定することの困難さが決定づけられた。さらに Ahlwardt (1870) をはじめ多くの先行研究で、同一編者による同一詩集であっても、写本によってカシーダの語句や読み方、詩行の数や配列、カ

シーダの掲載順序、集録されているカシーダの内訳が異なることも指摘されている。

以上のように、ジャーヒリーヤ時代のアラブ古典詩が写本によって大きくことなることはすでに周知のことであるが、これまでは、違いがカシーダの内容に及ぼす影響など主に意味的な関係が重視されてきたため、違いが現れる箇所や頻度、違いの分布、バリエーションなど「違いそのもの」が明らかにされることは少なかった。本論文では「違いそのもの」に注目して、その実態を明らかにするために、異なる5つの詩集に収録されている同一カシーダの比較分析を試みたい。

4. カシーダの形式と内容

まず、カシーダについてごく簡単に述べておくことにする。すでに述べたとおり、ジャーヒリーヤ時代の詩はカシーダと呼ばれる形式に発達した。このカシーダの語源は「何かの方向に進む、目的に到達するように努力する」という意味の動詞 *qaṣada* である。この名前が示すように、本来カシーダはストレートではなく、遠まわしな方法で主題を表現する詩の形式である (Goldziher, 1966:10)。カシーダの特徴は、長ければ100行にも及ぶほどの「長詩」であること、韻律や押韻規則に厳しく制限されていること、複数のテーマの混合体であることの三点である。

4.1 形式

4.1.1 韻律

カシーダの各行は、上の句と下の句から成り立ち、それぞれは一定の長音節と短音節の組み合わせ⁸でできている。この音節の組み合わせの配列によって韻律が決まる。いずれの句も同一の韻律を保ち、さらに構成する全行が同じ韻律でなければならない。

音節の組み合わせ (タフィール *tafīl*) は8種類だが、それぞれに変形が存在する。

韻律 (バハル *baḥr*) は16種類あるが、アラブ古典詩において最もよく用いられ、後述のイムルウカイスの詩も「タウィール (*tawīl*) 調」なのでここではタウィールを例にとって説明する。タウィールは「短-長-長」「短-長-長-長」「短-長-長」「短-長-長-長」が基本で「短-長-長」には「短-長-短」、「短-長-長-長」には「短-長-短-長」などのバリエーションもある。

短音節を ∪ 長音節を - として図示すれば次のようになる。

∪ - ∪ | ∪ - ∪ - ∪ - | ∪ - ∪ | ∪ - ∪ - ∪ - || ∪ - ∪ | ∪ - ∪ - ∪ - | ∪ - ∪ | ∪ - ∪ -

4.1.2 脚韻

古いカシーダでは第一行目の上の句と下の句は韻を踏まなければならない、しかもすべての行末で同じ韻が繰り返されなければならない規則になっている。第一行目の下の句の脚韻文字⁹によってカシーダの区別がなされる。この文字がアラビア語のアルファベットの23番目の文字 *lām* であればそのアラビア文字名から *lāmīya* と呼ばれる。

4.1.3 文法的破格

厳しい韻律と脚韻規則に規制される一方で、行の最終音節で短母音の長母音化、短母音

の省略、追加などの緩和が認められている。また詩においてのみ許される語法 (poetic licenses) も数多い。

4.2 内容

典型的なカシーダは、ナシーブ (nasīb, the amatory prelude)、タカッルス (takalluṣ, disengagement)、ガラド (ġarad, the main theme) の三部から構成され、各部は以下のようにまとめられる。Bateson (1970:25-27)。

ナシーブとは、聞き手の郷愁や共感を喚起するための部分で、ここでは、廃墟と化した野営地の跡にたたずみ今は離れてしまった愛人との恋の思い出が切なく歌われる。しかしナシーブの役割はそれだけではない。ナシーブは詩の中で最も高度に形式化された箇所、詩人が自分の技量を最も発揮できる部分である。したがってナシーブを比較することによって、カシーダの伝統的要素を正確かつ緻密に評価することができる。

ナシーブでの詩人の目的は、美的感覚・表現力・語法の簡潔さ・迫真性において先人たちやライバルたちを凌ぐために、彼の持ちうるすべての技でテーマを美しく飾り立てることである。

見事なナシーブで聴衆を惹きつけた詩人は、多くの場合、恋人との離別から彼自身の旅への描写に移る。そのため第二部はしばしば旅のテーマと呼ばれている。ここでの目的は、自らを詩人としてだけでなく部族における勇者として称賛することである。詩人の馬やラクダの描写は彼自身を反映するものである。もし馬が迅速に突進したり、多くの負傷を受けたならそれは彼が幾多の戦いに参戦したことを意味し、ラクダが長時間渴きに耐えていれば彼自身もまた過酷な旅の非常に困苦に耐えうる男であることを示唆する。きわめて情熱的に歌い上げられる部分である。

旅のテーマのあと、いよいよ最終部である本題へと入る。ここは、詩の中で、厳格さという点ではもっとも制約の少ない、多様な要素 (部族生活の肖像、酒盛り、嵐、詩人やその部族の勇敢さ、パトロンへの気前のよさ、戦いや襲撃、教訓的かつ悲観的な砂漠の倫理観など) を含む部分である。伝統的な方法で伝統的なテーマを扱いながらも詩人が最も自由に表現した部分である。

5. イムルウルカイスのカシーダ

5.1 イムルウルカイス

イムルウルカイスは、ラーウィーたちによってその詩や人について数多くの伝承をもたらされた最古の詩人と言われている。ラーウィーたちの伝えるところによると、彼はキングダ族 (Banū Kinda)¹⁰の王子で、名はハンダジュブヌフジュル (Ḥandaj Ibn Ḥujr)、別名をイムルウルカイス、異名をアブーフフブ (Abū Wahb) といい、母親はファーティマビントラビーア (Fāṭima Bint Rabīa) だということだが、彼自身の名前および母親や父親の名前については異なる意見もある。また彼はアブーフハリス (Abū Ḥarīṭ)、アルマリクルダリール (al-Malik al-Dillīl)、ズールクルーフ (Dū al-Qurūḥ) としても知られている。彼の

名前に結びついた伝説や伝承は数多く流布しているが、それがジャーヒリーヤ時代から継承されたものであるかどうかは定かではない (Ḥusayn, 1958: 195)。

5.2 形式

前述したように、脚韻文字が *lām* の *lāmiya* で、韻律は、タウィール調となっている。第1行目の韻律は次のようである。なお日本語訳は池田 (2003: 5) を使用した。

qifā nabki min dikrā ḥabībin wa manzilī bi siqṭi l liwā bayna d daḡūli fa ḥawmalī
 ◡ - ◡ | ◡ - - - | ◡ - - | ◡ - ◡ || ◡ - - | ◡ - - - | ◡ - ◡ | ◡ - ◡ -
 止まれ、恋人とその住まいを思い出して、さあ泣こう。アッダフルとハウマリと

fa tūḍiḥa fa l miqrāti lam ya'fu rasmu-hā li-mā nasajat-hā min janūbin wa šam'alī
 ◡ - ◡ | ◡ - - - | ◡ - - | ◡ - ◡ - || ◡ - - | ◡ - - - - | ◡ - - - | ◡ - ◡ -
 トゥディフとアルミクラートの間の、砂が寄り合うふちべに、彼女の住まいはまだ跡形を留めているが、それは南風と北風が織り成したものである。

tarā ba'ara l 'ar'āmi fī 'arašāti-hā wa qī'āni-hā ka'anna-hū ḥabbu fulfilī
 ◡ - ◡ | ◡ - - - | ◡ - ◡ | ◡ - ◡ - || ◡ - - | ◡ - ◡ - | ◡ - - - | ◡ - ◡ -
 中庭やその先に広がる低地を見れば、コショウの実さながらのレイヨウの糞が散らかっている。

5.3 内容

Bateson (1970: 42-44) は、このカシーダを次のように分析している。

このカシーダの特徴は、ナシーブから旅のテーマに移る前に、詩人の数々の情事についての逸話が克明に叙述され、詩に並外れたエロティシズム¹¹を与えていることである。

カシーダは厳密な意味でのナシーブで始まる。かつて恋人と過ごした野営地の殺伐たる風景の描写は真に迫り、一方恋人は匿名で語られる。簡潔で見事なナシーブは、詩人を数々の情事への回想へと導く。

走馬灯のように浮かぶ恋人たちとの思い出は大胆かつ繊細にしかも生々しく歌い上げられている。恋人たちは、その一人一人の美しさが芸術的に描写されている。

愛に溺れ、捨てられた彼は、その軽率さを誹謗されて失意の底に沈むが、生き生きとした夜の描写によって次の旅のテーマへと見事に移行する。

旅のテーマでは実際の旅ではなく、2つの狩猟における馬の勇敢な様を称賛している。獲物の血に染まりながらも野獣さながらに荒れ狂う馬と狩の描写¹²は鮮やかに視覚に訴える。

最終部のテーマは嵐である。ここでの目的は純粹なる審美的楽しみの追求といえる。書き出しや詳細な自然の豊かさの描写はナシーブを彷彿とさせ、カシーダが本筋から逸れることを防いでいる。猛烈に吹き荒れる嵐¹³、その嵐が残した悲惨な爪あと、しかし嵐によっ

て清新された穏やかな砂漠の描写でカシーダは終わる (Bateson, 1970:42-44)。

6. イムルウルカイスのカシーダに見るバリエーション

ここでは、最も有名なジャーヒリーヤ時代の詩人であるイムルウルカイスの代表的なカシーダにどのようなバリエーションがあるかを検討してみたい。

テキスト¹⁴には池田 (2003)、Ahlwardt (1870)、al-‘Aṭṭār (2002)、al-Zawzanī (1921)、al-Zawzanī (2002) を用いる。池田 (2003) は、al-Zawzanī¹⁵、al-Anbānī¹⁶、al-Tibrzī など複数の詩集を参考にしてまとめられた最も包括的なテキストと言える。また日本語訳は当時のアラブ人の気質や生活を見事に再現するだけでなく、言語学的理解にも非常に有効である。Ahlwardt (1870) は、Ela‘lam¹⁷による主に2つの写本を独自の方法で編集したものである。分析対象とした写本は約20¹⁸に及び、写本間の主な相違点は一覧表で示されている。al-‘Aṭṭār (2002) は、基本的には al-Zawzanī (1963, 1978) に依拠しながらも al-Anbānī (1963) や al-Šinqīṭī (n.d.) も参考に再編集されたものである。池田 (2003) および al-‘Aṭṭār (2002) が参考とした al-Zawzanī のテキストとして本論文では al-Zawzanī (1921, 2002) を採用することとした。以後、各テキストは順に I、Ah、At、Z-a、Z-b で示した。なお、日本語訳、および詩行のナンバリングは、池田 (2003) をそのまま利用した。

7. 各テキストに見られる違い

各テキストに見られる違いは、「単語の違い」と「詩行の違い」に大別できる。

7.1 「単語の違い」

「単語の違い」をただ漫然と列挙すれば約40あるが、これらは以下の8つのグループに分けることができる。

(1) 単語そのものが異なる場合

頻度が最も高く、18例ある。そのうち最も典型的なケースは、同じ意味の異なる単語が使われている場合で、18例中5例である。たとえば11行目、I と Ah では、「ラクダの鞍に積まれた荷物」に riḥl という名詞が使われているが、Z-a、Z-b、At では同じ意味を表す別の名詞 kūr が使われているようなケースである。その他には同一音の単語を動詞と見なすか前置詞と見なすかで異なる場合が1例、非常によく似た音を持つ別の単語の場合が2例ある。さらに単数形と複数形で異なる場合が1例確認されるが、詩人あるいはラーウィーの高いアラビア語能力を反映するものとして興味深い。しかし中には写本の不鮮明さや不注意からの単純なミスと思われるケースも少なくない。どの時点で混乱が生じたかを決定するのは困難だが、24行目の yuširrūna (彼らは批難する) のようにすでに初期の段階で認識されていたことが明示されている場合¹⁹もある。ちなみに At 以外のテキストでは yusirrūna (彼らは秘密にする) となっている。yusirrūna では「私を殺そうと密かに狙う」の意味となり文脈と合うが、yuširrūna では「私を殺すことを批難する」となって不自然な意味となる。

ただし rihhl と kūr にしても yuširrūna と yusirrūna にしても長短の音節構造は同じで韻律に影響をあたえることはない。

(2) 母音の発音が異なる場合

単語そのものは同じだが発音が異なる場合である。12行目の「白絹の房飾り」は Z-a では ad-dimiḡsi と読まれるが、他のテキストでは第二母音が a で ad-dimaḡsi と読まれているようなケースである。

ただし、本来、アラビア語は母音を表記しないので、固有名詞や一般的でない単語の発音に乱れが生じることは珍しいことではない。したがって母音の違いをバリエーションと見なすかどうかは検討が必要である。

また (1) と同様に、この場合も韻律が変わることはない。

(3) 人称代名詞が異なる場合

35行目「その房」の「その」に I、Ah、Z-a では、3人称、男性、単数形の人称代名詞 hu²⁰を用いているが、Z-b、At では3人称、女性、単数形の人称代名詞 hā が使われているようなケースである。代名詞が指す単語の解釈の違いによるものと考えられるが、hā を使うべきところが hu になっている意味的にも文法的にも明らかに誤ったケースが2例確認された。

(4) 接続詞が異なる場合

Z-b、At では、24行目の冒頭に等位接続詞である fa (そして) があるが、I、Ah、Z-a にはない。なお、fa がある場合は直後の動詞が jāwaztu (私は忍び込んだ) で、fa がない場合は tajāwaztu (私は忍び込んだ) になるのは、韻律の関係からであろうが、幸いこの2つの動詞はほとんど同じ意味である。

(5) 前置詞が異なる場合

46行目²¹、I、Ah では「～の中」を表す fi²²が使われているが、Z-a、Z-b、At では「～から」を表す min²³になっている。

(6) 格語尾が異なる場合

58行目 I、Z-a、At では主格を示す格語尾 u が付いた al-ḡulāmu (若者は) となっているが、Ah、Z-b では対格を示す格語尾 a が付いた al-ḡulāma (若者を) となっている²⁴。

(7) 単語が脱落している場合

13行目 I、Ah、Za、Zb では kidra ‘unayzatin (ウナイザ (恋人の名前) の乗りかご) であるが、At は kidra がなく ‘unayzatin (ウナイザの) だけである。ただし、At では明らかに文法的に矛盾するのでこれは単なる印刷ミスの可能性が高いと思われる。

(8) 単語の順序が異なる場合

10行目 I、Za、Zb、At は、la-ka min-hunna ṣāliḡin (あなたにとって彼女らとの楽しい(日)) であるが、Ah では ṣāliḡin (楽しい) が先に来て ṣāliḡin la-ka min-hunna (同上) となっている。

上記の違いを表にまとめると次のようになる。

なお、表中日本語訳は原則として (池田, 2003) に依拠するが、*印は筆者の訳である。

7.2 「詩行の違い」

	詩行	I	Ah	Za	Zb	At
(1)	11	li-riḥli-hā ラクダの鞍に積 まれた荷物に	li-riḥli-hā ラクダの鞍に積 まれた荷物に	min-kūri-hā ラクダの鞍に積 まれた荷物から*	min-kūri-hā ラクダの鞍に積 まれた荷物から*	min-kūri-hā ラクダの鞍に積 まれた荷物から*
(2)	12	ad-dimaqsi 白絹の房飾り	ad-dimaqsi 白絹の房飾り	ad-dimiqsi 白絹の房飾り	ad-dimaqsi 白絹の房飾り	ad-dimaqsi 白絹の房飾り
(3)	35	ḡadā'iru-hu その巻き毛	ḡadā'iru-hu その巻き毛	ḡadā'iru-hu その巻き毛	ḡadā'iru-hā 彼女の巻き毛*	ḡadā'iru-hā 彼女の巻き毛*
(4)	24	tajāwaztu 私は忍び込んだ	tajāwaztu 私は忍び込んだ	tajāwaztu 私は忍び込んだ	fa-jāwaztu そして私は忍び 込んだ*	fa-jāwaztu そして私は忍び 込んだ*
(5)	46	fī ～の中に	fī ～の中に	min ～より*	min ～より*	min ～より*
(6)	58	al-ḡulāmu 若者は	al-ḡulāma 若者を*	al-ḡulāmu 若者は	al-ḡulāma 若者を*	al-ḡulāmu 若者は
(7)	13	ḡidra 'unayzatin ウナイザの乗り かご	ḡidra 'unayzatin ウナイザの乗り かご	ḡidra 'unayzatin ウナイザの乗り かご	ḡidra 'unayzatin ウナイザの乗り かご	'unayzatin ウナイザの*
(8)	10	la-ka min-hunna ṣāliḥin あなたに彼女ら との楽しい*	ṣāliḥin la-ka min-hunna あなたに彼女ら との楽しい*	la-ka min-hunna ṣāliḥin あなたに彼女ら との楽しい*	la-ka min-hunna ṣāliḥin あなたに彼女ら との楽しい*	la-ka min-hunna ṣāliḥin あなたに彼女ら との楽しい*

「詩行の違い」も3つに分けることができる。

(1) 詩行そのものが異なる場合

30行目Iでは madadtu bi-ḡuṣṣay dawmatin (私がドウマの二つの枝に手を伸ばすと) だが、他のテキストでは haṣartu bi-fawday ra'si-hā²⁵ (私が彼女の顔の両側に手を当てると) である。あるいは別の例として Z-a、Z-b、At では47行目の前半と48行目の後半で1つの詩行になっているケースもこれに含まれる。

(2) 詩行の脱落

たとえば、Z-a、Z-b、At では49～52行目が脱落²⁶しているようなケースである。

(3) 詩行の順序

Z-a、Z-b、At では31行目と32行目の間に41行目が入り、31-41-32の順になっているようなケースである。

7.3 分析のまとめ

「単語の違い」は、一見、広範囲で複雑なようだが、それぞれには2つの共通点がある。まず1つ目は「違い方が限定的であること」である。(1)のケースとして riḥl と kūr の例を挙げたが、5つのテキストに使われている「ラクダの鞍に積まれた荷物」を表す単語は、riḥl と kūr の2種類だけである。それ以外の「ラクダの鞍に積まれた荷物」を表す単語は

使われていない。つまり「違う」とはいえ5つのテキストで用いられる単語がばらばらに異なっているわけではない。(5)の前置詞についても同様である。fi(～の中に)やmin(～から)以外にも前置詞の種類は非常に多いにもかかわらず、46行目の違いは、どのテキストでもfiかminのどちらかであって、テキストによって使われる前置詞がまちまちというわけではない。2つ目の共通点は「違いの発生箇所が極めて限定的なこと」である。(3)の人称代名詞について言えば、カシーダに使われている人称代名詞は全部で80以上ある。しかし、5つのテキスト間で混乱が見られる人称代名詞は全部で3箇所だけである。(5)の前置詞に関しても同様である。前置詞は全部で100以上使われているが、違いが見られるのはたった1箇所にすぎない。(4)接続詞に関しては、本カシーダでは、接続詞fa(そして)があるかないかの違いだけで、別の接続詞が使われるといった接続詞同士の混乱は全く認められなかった。ちなみにアラビア語にはいわゆる等位接続詞が2種類あり、文法学上は明瞭に区別されているものの、後世の文学作品においてしばしば両者が混乱して使われる。それを考慮すれば本カシーダにおける接続詞の正確さは賞賛に値するものといえよう。「詩行の違い」も「単語の違い」と同様、「違いの発生箇所が極めて限定的」と言う点で共通している。詩行の脱落が起こる箇所は2箇所、詩行そのものが異なる場合も2箇所である。詩行の配列や詩行数の違いは、「詩行の順番」と「詩行の脱落」の組み合わせの結果生じたものと見なすことができる。

8. まとめ

現在、信憑性があり完成度が高いと評価されている5つのテキストに収録されたジャーヒリーヤ時代を代表するカシーダでさえ、二つとして同じものはなかった。このことはいかにオリジナルのカシーダを決定することが困難であるかを如実に示すものであろう。しかしこのカシーダに関する限り、写本間の違いは決して無秩序ではなく、限定的、かつ規則的であったと言える。とりわけ接続詞や前置詞、人称代名詞など文法上の混乱が極めて少ないことは、詩人のみならずラーウィーや編者たちの高度な言語知識を証明するものとして興味深い。

イムルウルカイスの伝承や説話が、ジャーヒリーヤ時代のものか否か、その説話に結びついたカシーダがジャーヒリーヤ時代のものか否かといったカシーダそのものの信憑性については本論文の範囲をはるかに超えるものなのでここでは触れないが、少なくとも伝承については正確であったと言えるのではないだろうか。

厳密な韻律と脚韻規則に制限されたカシーダでは、韻律を破る相違は原則的にありえないという事情が働いて、テキスト間の相違も韻律内の限定的で小規模であったのかもしれない。しかしこれはどのカシーダにも共通することなのであろうか？

今回の分析ではテキスト間の大きな相違は見つからなかったが、さらに大きな異同・削除・追加などが見つかる可能性は否定できず、その分析は今後の課題となった。

参考文献

- 池田 修 「アルムアッラカート試訳 (I) イムルアルカイス」『関西アラブ・イスラム研究』3, 2003, pp. 1-13.
- イスラーム辞典 大塚 和夫他編 岩波書店 2002.
- 杉田 英明 「世界の芸術家の靈感源」『コーラン アラビアン・ナイト… 週刊朝日百科世界の文学 118 名作への招待』池田 修編 朝日新聞社 2001.
- 西尾 哲夫 『図説 アラビアンナイト』河出書房新社 2004.
- ヒッテイ. K. F. 『アラブの歴史 (上、下)』岩永 博訳 講談社学術文庫 1982.
- Ahlwardt, W. *The Divans of the Six Ancient Arabic Poets*, London, 1870.
- al-‘Aṭṭār, Slaymān *al-Mu‘allaqāt al-sab‘*, Cairo, 2002.
- Bateson, M. C. *Structural Continuity in Poetry, A Linguistic Study in Five Preislamic Arabic Odes*, Paris, 1970.
- Encyclopedia of Arabic Literature* 2 vols, ed. J.S. Meisami, P. Starkey, Routledge, 1998, [E. A. L.].
- Goldziher, I. *A Short History of Classical Arabic Literature*, Hildesheim, 1966.
- _____ “Ḥutay’a”, *Encyclopaedia of Islam* New ed. vol. 3, Leiden, p641.
- Ḥusayn, Tāḥā *Fī al-adab al-jāhili*, Cairo, 1958.
- Nouryeh, C. *Translation and Critical Study of Ten Pre-islamic Odes*, New York, 1993.
- el-Tayib, Abdulla “Pre-Islamic poetry,” *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period*, ed. A.F.L. Beeston et al., Cambridge, 1983, pp. 27-113.
- Wright, W. *A Grammar of the Arabic Language*, 3rd. ed., 2 vols. in 1, Beirut, 1974.
- al-Zawzanī, Aḥmad. b. al-Ḥusayn *Šarḥ al-mu‘allaqāt al-sab‘*, Beirut, 2002.
- _____ *Kitāb šarḥ al-mu‘allaqāt al-sab‘*, Cairo, 1921.

註

- 1 カシーダについては本論文4で後述。
- 2 アラブでは、イスラーム勃興以前を「無明」の時代という意味で「ジャーヒリーヤ時代」と呼ぶが、文学的には特にイスラーム前約150年（西暦5世紀末以降）を指し、アラブ古典詩はこの時代に黄金期を迎えたとされている。
なおジャーヒリーヤをアラビア文字で表記すれば الجاهلية となるが、本論文ではアラビア語はローマ字転写で表記する。
- 3 アダブは今日、一般的に文学を指すアラビア語である。
- 4 すでに東アラブでは、18世紀初頭にシリアのアレッポで最初の印刷所が設立された。その後、レバノンやバイルートにも建てられたが、それらはローマ聖教やカトリック教会による印刷所で、主に福音書やモーセの五書を始めとする礼拝用の書物が印刷されていた。
- 5 プーラーク印刷所で最初に印刷されたのは『アラビアン・ナイト』である（西尾, 2004:23）。
- 6 代表的なムアッラカート詩人であるズハイル（Zuhayr Ibn Abī Sulmā, d. 609）は、母方の叔父、バシャマブンアルガーディル（Bašāma Ibn al-Ġādir）とアウスブンハジャル（Aws Ibn Ḥajar, d. 620）のラーウィーであると同時に、彼自身はフタイア（al-Ḥuṭay’a, d. 678?）というラーウィーを持っていた（el-Tayib, 1983:29）。
- 7 著者ターハーフサイン（Tāḥā Ḥusayn, 1889-1973）はエジプトの学者、作家。カイロ大学で博士号取得後フランスに留学、帰国後カイロ大学文学部古代史教授、のちにアラブ文学教授となる。小説家としても名声を確立。アラブ文学に関する著書論文は多数。教育改革にも尽力した。（イスラーム辞典, 2001:609）。
- 8 アラビア語には1種類の単音節「子音+短母音」と2種類の長音節「子音+長母音または二重母音」「子音+短母音+子音」がある。

- 9 脚韻文字および押韻の細則は、Wright, 1974, vol. 2, pp. 352–354を参照。
- 10 480年頃から529年までの約50年間、アラビア半島の中央部から北部にかけての諸族を統合してキンダ王朝を樹立した。南アラビアのヒムヤル王国を後盾にユーフラテス地方のラフム朝やシリアのガッサーン朝に対抗した（イスラーム辞典, 2001:323）。
- 11 その例として26行目が挙げられる。
fa-ji'tu wa qad naqat li-nawmin tiyāba-hā ladassitri 'illā libsata lmutafaḍḍali
訪ねてみると、彼女はテントの中で衣装を脱ぎ、眠りにそなえ薄地の寝巻きだけを身にまとっていた（池田：2003, 8）。
- 12 その例として63行目が挙げられる。
ka-'anna dimā'a lhādiyāti bi-naḥrihi 'uṣārat ḥinnā'i bi-šaybin murajjali
群れを先導する野牛の血が午の首を染めているが、あたかも、それは白髪のを巻き毛を赤く染めたヘンナの汁のようだ（池田：2003, 8）。
- 13 その例として72行目が挙げられる。
yuḍi'ū sanāhu 'aw maṣābiṭhu rāhibin 'amāla ssaliṭa bi-dḍubāli lmufattali
光り輝くさまは、よじられた芯に油を注いで照らす修道僧の灯火のようだ（池田：2003, 9）。
- 14 本分析では現在、最も完成され、信憑性の高いテキストとして5つの詩集を選んだ。しかし写本そのものを編集したテキストとすでに編集されたカシーダを再編集したテキストが混在しており、比較対照テキストとしての有効性には若干の疑問を残したままとなった。テキストの選択も今後の課題の一つである。
- 15 Abū'Abd Allāh al-Ḥusayn Ibn Aḥmad al-Zawzanī (d. 1093)、言語学者、アラビア語-ベルシャ語辞書編纂多数、ムアッラカートの解説書 (*Šarḥ al-mu'allaqāt*) は特に有名 (E. A. L., 1998:822)。
- 16 al-Anbārī Abū Bakr Muḥammad Ibn al-Qāsim (885–940)、ハディース学者、言語学者、著書に *Šarḥ al-qaṣā'id al-sab' al-ṭiwāl al-jūhiliyāt, Kitāb al-adād* など (E. A. L., 1998:89)。
- 17 Yūsuf Ibn Sulaymān al-A'lam al-Šantamrī (1019–1083)、アンダルシアの言語学者、著書に *Šarḥ al-mu'allaqāt, Šawāhid Sibawayh* (E. A. L., 1998:704) など。
- 18 比較分析した写本については Ahlwardt, 1870, pp. XV 11 ~ XXV 1 を参照。
- 19 「Ela'lam は yuširrūna としているが、Ela'lam 自身は yusirrūna の方が適切であると述べている。」 (Ahlwardt, 1870:73)
- 20 韻律上、実際の発音は-hū となる。
ḡadā'iru-hū mustašzirātun 'ila l 'ulā taḍillu l 'iqāšu fī muṭannan wa mursali
○-○|○- - -|○- - -|○- - - || ○- - -|○-○-|○- - -|○- - -
その巻き毛は束ねられて競り上がり、一部は二筋に、他は乱れて、彼女の額に垂れ下がっていた。
池田 (2003:7)
- 21 英訳では “go on, unveil the morning” (Nouryeh, 1993:58)。
- 22 池田 (2003:7) では、「夜明けがそなたに勝る」と訳されている。
- 23 al-Zawzanī (1921:26, 2002:23) は、この min を「min+比較級」の min で「～より」の意味と解釈している。
- 24 池田 (2003:8) では、「若者は（馬の背から）滑り落ち」と訳されている。al-Zawzanī (2002:28) の注釈によると「(馬が) 若者を滑り落とし」と解釈されている。
- 25 池田 (2003)、al-Zawzanī (1921, 2002) によると別の伝承もある。
- 26 この4行は他の詩人の作であるという説もある。